

# ニュースレター

No.18

News Letter

CONTENTS

- 巻頭言…………… 1
- 公開シンポジウム…………… 2-3
- 足尾を訪れた二宮尊徳と坂田 祐…………… 4-6
- 極限状況における人間の反応…………… 6-7
- 研究員・客員研究員の広場…………… 8



## 巻 頭 言 所 長 松 田 和 憲

2007年度も間もなく終ろうとしていますが、ここに「キリスト教と文化研究所」ニュースレターNo.18をお送りできますこと、嬉しく存じます。

今号では研究所の年間を通じての具体的活動については、今まで「ニュースレター」「所報」等で再々報告しておりますので繰り返すことは致しませんが、2007年4月より所長を引き継いでから、この3月で初年度を終了するにあたり、わたし自身が年間を通じて感じました事柄の幾つかを挙げ、多少総括的にまとめる形で「巻頭言」に替えたいと存じます。

まず、今年度の研究所全般の諸活動において、評価すべき第1点目と致しましては、全体として、それぞれの研究グループ、プロジェクトチームが、主体的・実践的に研究かつ情宣活動を行ってきたという点にあるということです。様々な企画、集いがある度にご案内を頂きながら、多忙のために、所長として望むほどには参加が許されなかったのですが、後になってから文書や写真等で報告を目にする時、限られた予算、時間の中でそれぞれが工夫を凝らしながら、会を運営していることが読み取れ、わが研究所の活動も徐々に定着しつつあることを実感し、この点高く評価できると思います。

評価すべき第2点目としては、これは繰り返しになりますが、研究所の叢書第一号『バプテストの歴史的研究』を関東学院大学出版会から出版できたこと、そして各グループの独自の企画による講演会、シンポジウム、公開研究会等が活発に催されたという点、さらには、研究所としての通常の活動である研究会、読書会など、会によっては年間10回に亘る例会を開催できたことなど、これらのことも研究所としては大変喜ばしいことであると感じています。

次に、研究所の今後の課題について言及するならば、当面の課題として大事な点は、研究活動をさらに活発に発展させていくための財政的強化がどうしても必要であること、また、それぞれの研究グループ、プロジェクトチームが、さらに研究テーマを絞り込んで専門性を高め、深化発展させていくための十全の努力が必要であると痛感しています。次年度は、そうした課題について、少なくとももう一歩前進できればと願っています。どうぞ皆さん、今後もわが研究所のために、変わらざるご支援をお願い申し上げます。

関東学院大学キリスト教と文化研究所 国際理解とボランティアプロジェクト主催  
公開シンポジウム「外から見た日本」～タイと日本の共通点と相違点～(1)

パネリスト：タイ国立チェンマイ大学人文学部日本語学科助教授 ベンジャーン・ジャイサイ  
国立法人弘前大学国際交流センター教授 大西 純  
司 会：(株)永田農業研究所研究員・北京大学中国社会信用研究所客員研究員 吉川 成美

### 学院長挨拶

関東学院はキリスト教に基づく教育をする学校であり、キリスト教と文化研究所ではキリスト教の持つ価値観を切り口とした研究をしている。人になれ、奉仕せよという校訓のもと、ただ研究、研究成果を発表するのではなく、社会とのかかわりの中で、奉仕という姿勢を持ち、キリスト教と文化を切り口とした活動をしている。

世界の中の日本、アジアの中の日本を理解するために、日本は他の国との相互理解を深めていくことが必要である。単に文化の調査、研究をするのではなく、地球上で同じ時間、同じ空間を共有するものとして、ともに生き、支えあえるように、様々な民族が持つ課題や文化をそれぞれが理解しあうことが必要である。関東学院のバックグラウンドであるバプテスト派の影響が色濃く残る、ミャンマー、タイをターゲットとしてそれぞれの文化や民族を理解するために、現地に行き相互に理解しあいながら一緒に力を合わせて共生できる世界を作り上げていこうという思いを持って活動している。

### 第一部

タイの地理、社会、国王、経済について大西先生よりレクチュアを受けた。

参加者のタイのイメージについて質問が行われた後、答えから導き出されたイメージについての説明が行われた。

仏教・踊り・よい国などの基本的なイメージを列挙した後、在タイ日本人についての説明を受けた。アメリカ合衆国・中華人民共和国・英国に次ぎ4番目に在留邦人が多く、4万人いる。しかし、在留届を出している日本人は少なく、実際には8万人くらいの日本人がいるのではないかと

そうであればアメリカ合衆国に次ぐ数になるといわれている。

タイの面積は日本の1.4倍(50万km<sup>2</sup>)、国土の80%が平野である。比較的広々とした国である。非常に平野が多い国なので、平野を中心として国が広がっている。

日本人は地図を見るとタイの国の形が象に似てるとよく言うことがあるが、タイ人にそれを言ってもまったく伝わらないようだ。感覚の違いだろうが、タイ人はクワンという大型の鎌の形に似ていると言うそう。タイは東部、北部、東北部、中部、南部に分かれている。今回タイからお越しいただいたベンジャン先生は北部、チェンマイの出身である。チェンマイの北はミャンマーになる。タイの周辺国はミャンマー、ベトナム、ラオス、カンボジアであり、タイ東北部とラオスは文化圏が同じラオ民族の国であった、そのため東北部で話されている言葉はほぼラオスと同じである。

タイの気候については、タイには3つの季節があるとアメリカ人が言う、Hot-Hotter-Hottestである。乾季、雨季、夏と分かれるタイは4月が一番暑く、平均気温は40度くらいである。そのため、4月がタイの夏休みであり、正月もこの時期である。正月を祝う祝い方は大変ユニークで、涼しくなるために、水を掛け合いお祝いする風習がある。

### 雨季と乾季について

乾季においてはタイ全体で約4ヶ月間全く雨が降らない。逆に雨季には川が氾濫し、川にいた魚が道路まで来てしまう。それをつかまえることが出来るくらいである。

### バンコクの名前の由来について

バンコクという町の名前は正式名称ではな



く、正式にはハーナコーン アモンラッタナコーシン マヒンタラーユッタヤーマハディロク ポップノッパラッタ ラーチャタニーブリーロム ウドムラーチャニウエート マハーサターン アモンピーマン アワターンサティット サッカタッティヤウイサヌカムプラシット、タイ人はクルンテープ(略)と呼び、またその意味は、イン神がウィッサヌカム神に命じておつくりになった、神が権化としてお住みになる、多くの大宮殿を持ち、九宝のように楽しい王の都、最高・偉大な地、イン神の戦争のない平和な、イン神の不滅の宝石のような、偉大な天使の都。1960年まではタイ人が出身地を書く場合、すべてを書かなければいけなかったが、その後クルンテープという略称が正式に用いられるようになった。では、バンコクという名はどこから来たのか。19世紀に欧米人が来たときに農民に「ここはどこか」と尋ねたが、農民は「どこから来たのか」と聞かれたと思い、その答えが「田舎(バンノーク)から来た」という答えであった。その後バンコクという地名になったのがひとつの説である。ほかにはバンコークという葦が沢山生えていたことから来たと言う説がある。

現在バンコクの人口は800万人、タイ最大の都市である。

### タイの民族について

タイはタイ民族が80%といわれているが、中国系の血が80%に流れているという。北部の特徴は白くて小柄、ぽっちゃり、南部の特徴はくっきりした目と顔、色黒い。少数民族ではカレン族、アカ族、リス族、モン族、パダウン族などがあるが、パダウン族の女性は首にリングを入れ40cm位首を長くする慣わしがある。

### ニューハーフについて

また、タイは性転換した男性に非常に寛容で市民権を得ている。

### タイの言語について

タイの主流言語はタイ語で、アクセントが4つある。文字は44の子音があり、長短の母音が

9個、母音と子音の組み合わせで音を作る。日本のシの音がなかったり、息がでる、出ないという発音の仕方の違いで、意味が変わってしまうので日本人にとって難しいようだ。

### タイの国旗について

ラーマ6世時代の1917年に赤、青、白の三色旗が制定された。中央の青は国王、外側の2本の白は仏教、2本の赤は国民を示し、国王が仏教と国民によって守られているとの意味がある。

### タイの貨幣と物価について

タイの通貨はバーツで日本の初任給が20万円とすると7000バーツ≒2.5万円(2008年)である。物価は日本より安く、ラーメン20B≒70円、アパート3000B≒10000円

### タイの年号について

タイは今年2551年、これは仏暦を使用しており、ブッダが亡くなった日を元年として数えているためである。西暦に543年をプラスして数える。

### タイの仏教について

日本は大乗仏教、他力本願であり仏門に入る必要はないが、タイの仏教は上座部仏教であり、自己救済が必要とされる。特に男性はブワットと呼ばれる出家を一生に一度しなくてはならない。期間は最低7日間から一般の最高は3ヶ月。また自然崇拜の影響がとても強く仏教と自然とのコンビネーションがタイの社会を形成している。大きな木には精霊が住み、各家には祠があり自然の神が住んでいるとされている。

### タイの国王

現国王はラーマ9世(プミポン国王)で国民から非常に敬われている。また、王族は生まれた曜日によって色が決まっていてそれをシンボルカラーとしている。現国王は月曜日に生まれたので黄色がシンボルカラーであり、国民は月曜日には黄色い服を自発的に着る。

(続く)

## 足尾を訪れた二宮尊徳と坂田 祐 (2)

### — 足尾再訪の思い出 —

坂田祐研究プロジェクト研究員 矢嶋 道文

〔二宮尊徳の見た赤水〕『二宮尊徳全集』第五巻に収録された嘉永6（1853）年の「日記」には、尊徳による足尾廻村の様子が詳しく記録されている。すでに尊徳は晩年期を迎えており、また、同年の廻村中娘文子を失った尊徳は、失意のうち籠に乗っての足尾入りであったが、廻村には籠を降りて細部の調査に臨んでいる。このうち、8月15日の日記の中で、尊徳は次のように書いている。

「石井啓兵衛、昨日まいり罷まり參り候そろう 挨拶あいさつに立寄たより候そろう 處ところ、荒銅吹立のぶんみきせ之の分ぶん為な見候みまう、其上そのうえ銅山どうざん迄いた同人どうじん案内あんないいたし、銅吹立どうふきだて候まうも為な見候みまう、吹立場ふきだてばも見聞みまう、銅山どうざんにて掘立候ほりだてまう様子ようす掘工ほりこう道具どうぐ為な見申候みまう、夫それより夕刻ゆふぐ相別あひわかれ、赤沢村あかざわむらへ致いた止ど宿候しゆくまう事こと 但ただ銅山どうざん権現ごんげん前まへ之の瀧たき致いた一見いつけん候まう事こと、右川みぎがわ銅氣どうきにて石不いしな残のこ赤錆あかさび（に）相成あひなり居候おりまう事こと」



（二宮尊徳像）

17世紀初めに開山した足尾銅山は、江戸時代を通じて夥しい量の銅を産出しており、長崎貿易による輸出銅のほか、多くの銅銭铸造（「寛永通宝」足尾銭）に用いられ、今は足尾銅山観光展示室において当時の铸造過程を模型などで辿ることができる。上記尊徳の記述は、足

尾銅山被害農民が請願に上京したのが明治30（1897）年のことであるから、およそ半世紀前に尊徳は赤水の兆候を察知していたことになる。

昨年、偶然にも、私の地元の郷土誌販売のため東京駅丸善本店を訪ねた折、足尾に関する論稿を見つけた。筆者は西成 健氏で私の学会仲間であった。400字で50枚ほどの論稿だが（「田中正造の経済思想・序説」『田中正造と足尾鉍毒事件研究』第14巻、2006年、随想社）、西成氏は同稿むすびにあたる部分で次のようにのべている。「銅山が先端産業であるという銅山の論理と対決するなら、銅が当時最大級の輸出品として外貨獲得源であり、だからこそ価値があるという論理を覆さねばならない。しかし、田中はこの点を直接論理的に攻撃することはなかった」。後日、同氏からもこの論稿が送られてきたが、論稿全体の調子としては「近代化の暴力に対し、一貫して被害者の立場に立って妥協なく抗した田中の思想」を冷静に評価したものであった。なお、送られてきた掲載誌の末尾には、2005年で10年目を迎えたという足尾の緑化運動紹介の記事があった。私の足尾踏査が1995年であるから、踏査の翌年から緑化運動が始められたことになる。



（2007年度、工場跡は世界遺産としての登録申請がなされた：1995年撮影）



〔足尾再訪〕足尾踏査の折、足尾の狭隘さに驚く反面、山々の美しさに感動し、おもわず「病身の尊徳も、廻村中、しばし憩いの一時を村々に求めることができたであろう」と旧稿に記した。同時に、訪れた同所の産業観光課で、同地が産業廃棄物処理場になる案を知り絶句した。尊徳も愛でた自然の美しさと、尊徳の足跡を何とか観光に役立てないものかと考えたが、よそ者の私に地元の事情は分からず、尊徳廻村中の思いを拙稿に載せるに止めた。

ニュースレター前号に、坂田記念館の梶さんを通じて「坂田祐先生の記念プレートが足尾に立てられたにもかかわらず、関東学院関係者が誰一人として植樹に訪れない」との中山由美子氏のご教示を伝え聞いた旨記したが、その知らせの時は「お詫びの気持ち」と、足尾に緑に戻る喜びや坂田先生をこのような形で評価して下さったことへの「感謝の気持ち」が同時におきた。中山氏の紹介では、植樹担当の一人が小野崎 敏氏とのことだったので、早速お電話してみると、例年4月の第4日曜日が植樹祭にあたり、是非その日においでくださいとのことであった。

キリスト教と文化研究所の運営委員であった私は、これを運営委員会に報告し、足尾訪問の計画案を坂田研究プロジェクトチームのリーダーである帆刈 猛先生にも相談した。訪問は、小野寺氏のアドバイスに従い、2006年4月の第4



(足尾銅山鉱夫宿舍跡にて-足尾は寒く遅い桜が咲いていた-)

日曜日とした。足尾訪問のメンバーは、研究所から帆刈先生と事務職ご担当の牛坊さんご夫妻、そして文学部からは、矢嶋のほか、小松翔一君（学生チームリーダー）、井上渉君、鈴木信一君、金敷匡弘君、菅谷 健君（以上、比較文化学科生）、阿久津和博君（現代社会学科生）に、経済学部35年度（第9回）卒の本田吾郎氏（栃木在住）を加えての総勢11名であった。当初の計画では、坂田創先生もご参加のご予定であったが、ご体調などの関係から参加は見合わせられた。

今回の植樹祭は、例年と異なり第3日曜日であり、我々はその1週間後に足尾入りした。同地では先の小野寺氏と、ご担当の神山英昭氏が植樹の準備を整えてくださり、関東学院にとっての初めての足尾記念植樹となった。



(周辺山々は1995年踏査の当時とは異なり、確実に植樹の効果が現れていた)

植樹の後は、小野崎さんのご案内で、足尾銅山関係の史跡を辿ったが、坂田先生の足跡を紹介したプレート板（ニュースレター16号、帆刈先生稿ご参照）のほか、坂田先生ゆかりの場所を見ることができた。最後に訪問した足尾歴史館では、展示された小野崎氏のお父様にあたる小野崎一徳氏（足尾銅山専属写真技師）の写真パネルに、稼動全盛時代の足尾銅山を参加者一同で振り返った。

かくして、我々の足尾訪問（記念植樹）は終わり、関東学院の名前が植樹記念プレートに載

ったが、訪問の際、ご案内いただいた小野崎氏より足尾銅山工場跡を世界遺産として登録申請することを知らされた。小野崎氏はすでにお父様が写された記録写真を大部の写真集として刊行され、近代史における足尾銅山を再評価し、書評にも多くの好意的な反響をえている。小野崎氏は、昼食休憩の後、お近くにあるご自宅2階に私を招き入れられ、夥しい銅山関係の写真を見せてくださった。その中に坂田先生の写真があれば教えてくださるとのことであったが、小野崎氏の刊行された写真集と好意的な書評の数々（近代史の見直し）を見て、前号末尾に触れた足尾銅山への歴史的再評価については、すでに私如きの任ではないことを深く悟った。

足尾時代の坂田先生は、坂田組の電気技師として公害防止にも関わっておられたようだが（本年3月発行所報『キリスト教と文化』第6号の所収、帆刈先生の稿をご参照）、足尾銅山における負の側面はそう簡単に拭えるものではない。したがって、足尾銅山への評価は、日本近代産業史の上での欠くべからざる雄姿と、田中正造による直訴という両極性の中で、今後もしばらくは揺れ動くのではないかとと思われる。ともあれ、足尾銅山への再評価が新たに始まったことで、坂田先生の校訓に学ぶ我々関東学院教職員・学生一同にとって、青年期を足尾に過

ごした坂田研究には一つの追い風を得たことになる。また、古川市兵衛の曾孫にあたられるという中山氏にとっても、これまでの憂苦からの正当なる解放のもとに、日本近代産業史への貢献という足尾銅山へのさらなる評価を期されてよいのではないかと思う。

歴史的出来事には、多くの場合負の側面と正の側面が見出されるが、その両者を公平に観察・評価しておく姿勢が評価者には要求される。坂田 祐先生の足跡を記念プレートに刻む足尾銅山の場合、負の側面を公益の観点から今後への教訓として前向きに克服する努力と、正の側面を謙虚に評価する姿勢が今後も必要なのではないか。



（この付近で坂田祐は電気工として働いていたという：2007年撮影）

## 極限状況における人間の反応

「いのちを考える」

研究グループ客員研究員 長井 英子

ヨーロッパにおけるユダヤ人への反感は、ヒトラー政権下のドイツのみに突然現れたわけではない。例えば黒死病が流行した14世紀、ユダヤ人は病気を蔓延させているとの疑いをかけられ、多くが殺害された。

グリム童話集にも、ユダヤ人への悪感情を露わにした物語が含まれている。「いばらの中のユダヤ人」（KHM 110）では、主人公は親切な行為への報酬として、小人から「狙ったものにならず当たる吹き矢」と「他人を踊らせるバイオリン」を贈られる。一見これは楽しい宝物譚のようではあ



るが、それらは悪魔を連想させる「長い山羊ひげを生やしたユダヤ人」に盗みを白状させ、死刑台に送るために使用されている。

ルース・ボディックハイマー著『グリム童話の悪い少女と勇敢な少年』によれば、これの源となった17世紀の物語では、いばらの中で踊らされるのはユダヤ人ではなくて修道士だった。しかし19世紀になって、内容の変更に関する言及を欠いたまま、現在のような形になったという。ユダヤ人大虐殺という最悪の出来事への道は徐々に開かれて行ったことになる。

V・E・フランクル著『夜と霧』は、収容所でのユダヤ人の過酷な体験を如実に語る貴重な記録である。

人間の尊厳を完全に剥奪された囚人たちは自己価値意識を喪失し、眼前で何が起ころうとも感情を動かさなくなる。しかし絶えず容赦ない暴力や罵倒にさらされ、狭苦しく不衛生な収容所に詰め込まれた人々の想像を絶するような生活の中でも、宗教的感覚が保たれて、祈りや礼拝が行われたとの意外な記述は、残酷な実話にキリスト教文学のような趣を与えている。

作者を支えていたのは揺るがぬ信仰だった。「私は彼等（囚人仲間）に言った。この困難の時と、また近づきつつある最後の時にわれわれ各自を誰かが求めるまなざしで見下ろしているのだ……一人の友、一人の妻、一人の生者、一人の死者……そして一つの神が。」(霜山徳爾訳 みすず書房 p.191)

愛する妻への思いも、彼の内的崩壊を防ぐための重要な拠り所となった。彼は強制労働の最中に妻の面影と語り合う。その神秘的体験は次のように記されている。

「愛する人間が生きているかどうか——

ということをは私はまったく知る必要がなかった。そのことは私の愛の思い、精神的な像を愛しつつみつめることを一向に妨げなかった。もし私が当時、私の妻がすでに死んでいることを知っていたとしても、私はそれにかまわずに今とまったく同様に、この愛する直視に心から身を捧げ得たであろう。そしてこの精神的な対話は今とまったく同じように力強く、かつ満足させるものであったであろう。」(p.125)

この感動的な記述は、どのような劣悪な状況下でも屈することのない強靱な精神力の勝利を証している。また作者は、収容所で人間の最も固有のもの、即ち内的自由を維持し続けた人々を次のように描写している。「彼等にとっては恐ろしい周囲の世界から精神の自由と内的な豊かさへと逃れる道が開かれていたからである。」(p.121)

戦後に逮捕された責任者アイヒマンは「自分はたんに命令に従って殺人を実行したにすぎない」と主張した。このような責任回避は枚挙に遑がなく、洋の東西を問わない。

『夜と霧』には、多くの囚人たちは自らが一個の主体であることを忘れたとの記述があるが、異常な心理状態に陥って残虐な行為を繰り返した加害者側にも、一貫した主体性が欠如していたことになる。けれども収容所の当局者の中には、終始人間性を失うことなく良心的に行動した人物があったことが言及されている。

平穏な生活にあっても人は思いもよらぬ行動に出ることがある。極限状況に置かれた時こそ、個人の本質は最も顕著に現れることになるのであろう。重大な局面で我々は果たして正しい行動を選択することができるのか。『夜と霧』は我々一人一人にそのような重い問いを突きつけている。

## 研究員・客員研究員の 広 場

### ◆ 「工学の人間がバプテスト史を研究するわけ」 客員研究員 古谷 圭一

私の専門は工業分析化学というところの何が分からないかもしれませんが、要するに、産業分野で必要な物質や材料、製品などの品質を化学的に測定することを対象とする学問に東京大学工学部と東京理科大学理学部で計30年間携わり、その後、恵泉女学園大学人文学部で人間環境学科の立ち上げに加わり、1999年からようやくかねてからの念願の私の母教会である日本基督教団四谷教会の歴史と取組めるようになりました。

私の高校・大学・大学院時代はこの教会の生活なしでは語れません。しかしながら、その教会は現在存在しません。その頃のことを知っている教会員の多くは既に80歳台に達し、お元気な方も少なくなりつつあります。ことにその解散期には出席者の数はきわめて少数となって、その頃のことを記録するには、その当事者だった私しかいないのが実情です。

四谷教会は、明治23(1890)年で東京第二浸礼教会として設立されました。その後、彰栄保母養成学校、彰栄幼稚園、東京学院、日本バプテスト女子学寮などの強い関係を持ち、千葉勇五郎、渡部元、青柳茂、阿部行蔵の方々を牧師として迎え、戦前には、石原イク、坂田祐を初めとする数多くのバプテスト関係者を育てました。また、小説家吉屋信子や評論家荒正人も求道者として通っており、その点では、日本のバプテスト史には欠くことの出来ない教会とも云えます。東京女子大の設計者、アントンニン・レーモンドの設計した会堂を戦災で失い、以後、阿佐ヶ谷の牧師館で活動は続けましたが、阿部牧師の舞鶴事件があり、その中で、大竹庸悦、加納政弘、沢野正幸らの支えも頂き、教団教派問題のはごまで解散となりました。教会は何を求めるべきか、バプテストの信徳はいかにあるべきかなどのヒントがここには隠されています。

この大切な歴史をまとめるには多くの方のお力を必要としますし、また、細かな事実を知っていただく必要もあります。また、それによって私自身のバプテストとしての信仰の学びと確認の機会となることを期待しています。

### ◆ 「宗教と経済社会の労働観」 客員研究員 伊藤 哲

本年度から客員研究員になりました伊藤哲(いとうさとし)と申します。私は、現在、非常勤で、関東学院大学3学部(経済・法・文学部)で「社会思想史」等を、また麗澤大学で「経済思想」を担当しております。

過日(2月2日)、初めて「キリスト教と日本の精神風土勉強会」に出席し、当日の講師であった神谷光信氏の「カトリシズムと昭和の精神史」を拝聴し、議論に参加させていただきました。非常に有意義な時間を持てた喜びを感じております。多くの勉強会に時間の許す限り出席したく存じます。私にとりまして、キリスト教との出会いは早く、故郷の鳥取県の米子カトリック教会付属聖マリア園の入園から始まり、中学3年まで当時のベルギー人神父に英語を習っておりました。従いまして、教会の雰囲気ならびに神様のお話を聞いて、体感して多感な時期を過ごしてきたこととなります。

さて、私自身の専攻分野はイギリスのスコットランド啓蒙思想研究であり、特にアダム・スミスの二つの著書「道徳感情論」と「国富論」分析にあります。このことは、人間の行為原理分析と政治経済社会の生成と展開を捉えることとなり、現代社会の考察には不可欠の時代であり、中核的思想であると考えています。また、ご存知のように、マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』やR.H.トーニーの『宗教と資本主義の興隆』等にも見られるとおり、私たちの経済社会の発展には精神的支柱が必要であったのですが、現代日本の労働問題におけるフリーターやニートの大量発生や、雇用形態の多様化という現象には果たして彼ら労働者の内側における精神的支柱たるものが存在するのでしょうか。私にはヴェーバーの次の言葉が現代経済社会を考える上で重要な意味を持っていると思われまふ。「営利のもっとも自由な地域であるアメリカ合衆国では、営利活動は宗教的・倫理的な意味を取り去られていて、今では純粋な競争の感情に結びつく傾向があり…」(岩波文庫、366頁)。この発言が今日の問題の端緒として思えてなりません。精神的支柱としての宗教と労働観の関係性を近現代のキリスト教思想を辿ることによって私なりに解明していきたいと思っております。どうぞ宜しくお願いいたします。

関東学院大学 キリスト教と文化研究所

〒236-8501

神奈川県横浜市金沢区六浦東一丁目50番1号

TEL: 045-786-7873(研究所直通)

発行者: 松田 和憲

Director: Kazunori Matsuda